

じびか歳時記「中秋の名月を愛でる号」Vol 44号

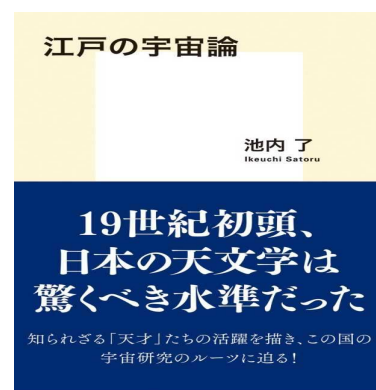
今年（2022年）は、9月10日（土曜日）が「中秋の名月」です。幼少の頃は、町内会か愛護会の催しで、綱引き大会や相撲大会などで盛り上がっていました。そして、自宅に帰れば、焼酎の一升瓶、ススキ、栗、お萩などが縁側に飾られ、そこで親父がチビチビと焼酎を飲んで十五夜を愛でていた姿が浮かびます。

「中秋の名月」を皆さんどのような思いで観ていますか。今回は、「中秋の名月にちなんで」という題で職員にエッセイを書いてもらいました。小生は、西行の「歎けとて月やはものを思わす かこち顔なるわが涙かな（嘆けとって月は物思いにふけらせるのだろうか、そうではなく恋ゆえの涙なのに・・・。月のせいであるかのように恨みがましく流れる涙だな。）」という和歌にも現れているように、昔の人たちが月や星々への憧れた歴史のロマンを想起します。また、「のちの月」と言われる十三夜（2022年10月8日：旧暦9月13日）も合わせてお供え物をしなければなりません。今回のおすすめの本は、樋口一葉の小説「十三夜」、池内了著「江戸の宇宙論」、魚豊作・画マンガ「チ。」の3冊です。なお「チ。」は内容的には少し残酷ですが、小院本棚に置いてありますので、自由にお読みください。「十三夜」はご存知の方も多いため、ここでの内容紹介は省略します。

◆1543年にポーランド人のコペルニクスが地動説を発表した。だが、そこに至るまでには、数多くの地動説を確信する人達が、異教徒として悲惨な最後を遂げた隠れた歴史がある。それをフィクションではあるが漫画に描いた「チ。」は非常な力作である。なぜ、天文に詳しい天才たちは地動説を確信したか、そこには規則的な恒星の動きに対して、不規則なまるで宇宙を迷っているかのような動きをしている惑星（水、金、火、木、土星など）の存在がある。「真理」を追求する人間の本质・信念を強く描いており感動的な漫画である。

◆そして、「江戸の宇宙論」は、コペルニクスの地動説、ニュートン力学、ケプラーの法則などをオランダ語の翻訳本として、日本に紹介しその物理学の内容すら理解していた当時

の志筑忠男と山片蟠桃などの物語である。16世紀のヨーロッパと1800年前後の江戸時代とは時代背景が違いすぎるが、初めて日本に紹介された地動説に対して幕府が極端な弾圧をしていないのは、当時の日本の文化レベルがある意味世界レベルに達していたと思われるからである。世界の動向を常に気にしていた、開かれた「鎖国」であったのだ。なお、近代物理学用語の、引力、求心力、遠心力、重力、分子、真空などを生み出したのも志筑たちの業績である。



集英社新書

～名月にちなんで…十五夜の思い出～

私が子供の時、地域の子供が集まってその時々に行事をする「子供会」というのがあり、この時期は夕方に集まり相撲をした記憶があります。みんなが集まりおやつを食べながらおしゃべりをしたり、走り回ったりと楽しい思い出です。

最近の我が家の十五夜と言えば、お団子作って（あんこ・みたらし）、ちょっと月を眺めて食べる！天気が悪ければ、空も眺めず直ぐ食べてます。子供の頃は、壁に生えているススキを探ってきて瓶に挿し、月にはウサギがいるんだと信じていましたね～（笑）

私の育った町では、十五夜に毎年お米の豊作を祝って行う「ソラヨイ」という伝統行事がありました。蒸を女性達が編んで、被り物や袴などの衣装を作り、男性がふんどし姿にそれらを身に着け、蒸で作った家の周りを踊るというものでした。地元のテレビ取材も来たりしていました。その後、女性も含め皆、蒸で編んだ綱で綱引きをしたり、相撲大会をした思い出があります。

十五夜で思い出すことは、子どもが小学生の頃地域で開催された相撲、綱引き大会です。子供は、必死に相撲を取り組む傍らで親は、寒を楽しみ観戦したことを思い出します。先日その話題で娘と懐かしく語りお酒がすすみました！今度も月見に乾杯！

十五夜と言えば、相撲！子供の頃地域で毎年あった行事が嫌でした。人数が少ないので、男女・学年問わず何回もやってました。毎回すぐに負けて・・・大人はなんこ大会。

（ご存知の方はあまりいないかもしれませんが・・・）
景品が出るのでみんなは楽しそうでした。

少し涼しさを感じる夜の縁側。一升瓶にいたススキ、お盆に盛られたお芋や果物。葡萄にのびる年の離れた弟・妹の小さな可愛い手が思い出されます。

子供の頃は毎年、十五夜の季節になると地域の行事でお相撲と綱引きをしていました。大人数の中で相撲をするので恥ずかしかったのですが参加しないとお菓子が貰えなかったので嫌々参加していたのを覚えています。大人になってからあまり十五夜を感じませんが今年は9月10日（中秋の名月）月を見上げてみたいと思います。